

0 1 . 不法占拠地帯に絡まる問題



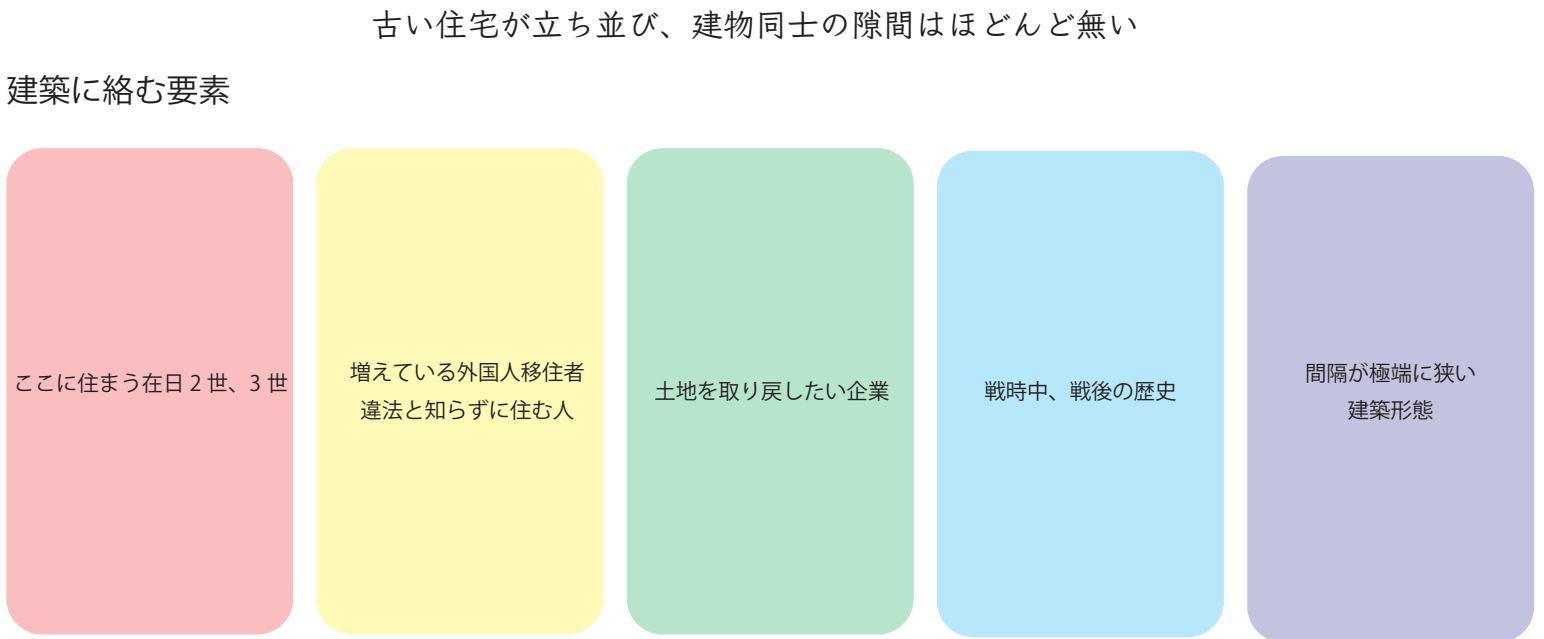
敷地「神奈川県川崎市川崎区池上町周辺」

戦時中に朝鮮半島から連れてこられた労働者が終戦になり行き場を失ったことからこの土地に住み着いた歴史がある。  
その当時から住む人や在日2世、3世の人が多い。  
土地の大部分はJFEスチールの所有物だが、許可なく住宅が立ち並んでいる。  
道幅など気にせず建てたため、道が細く、入り組んでいる。敷地の境界線も曖昧。戦時中、徴用として労働者を連れてきた背景から、強引に追い出すこともしないが、違法と知らずに住んでいる人が土地を変換した例もある。  
市からJFEスチールに住民に土地を売らないようお願いしている。  
コンビニエンスストアやコインパーキングなどの施設は見当たらない。  
周囲の市街と隔絶され、生活面のインフラが不十分。壁（高架、フェンス、運河）に阻まれている印象を受ける。

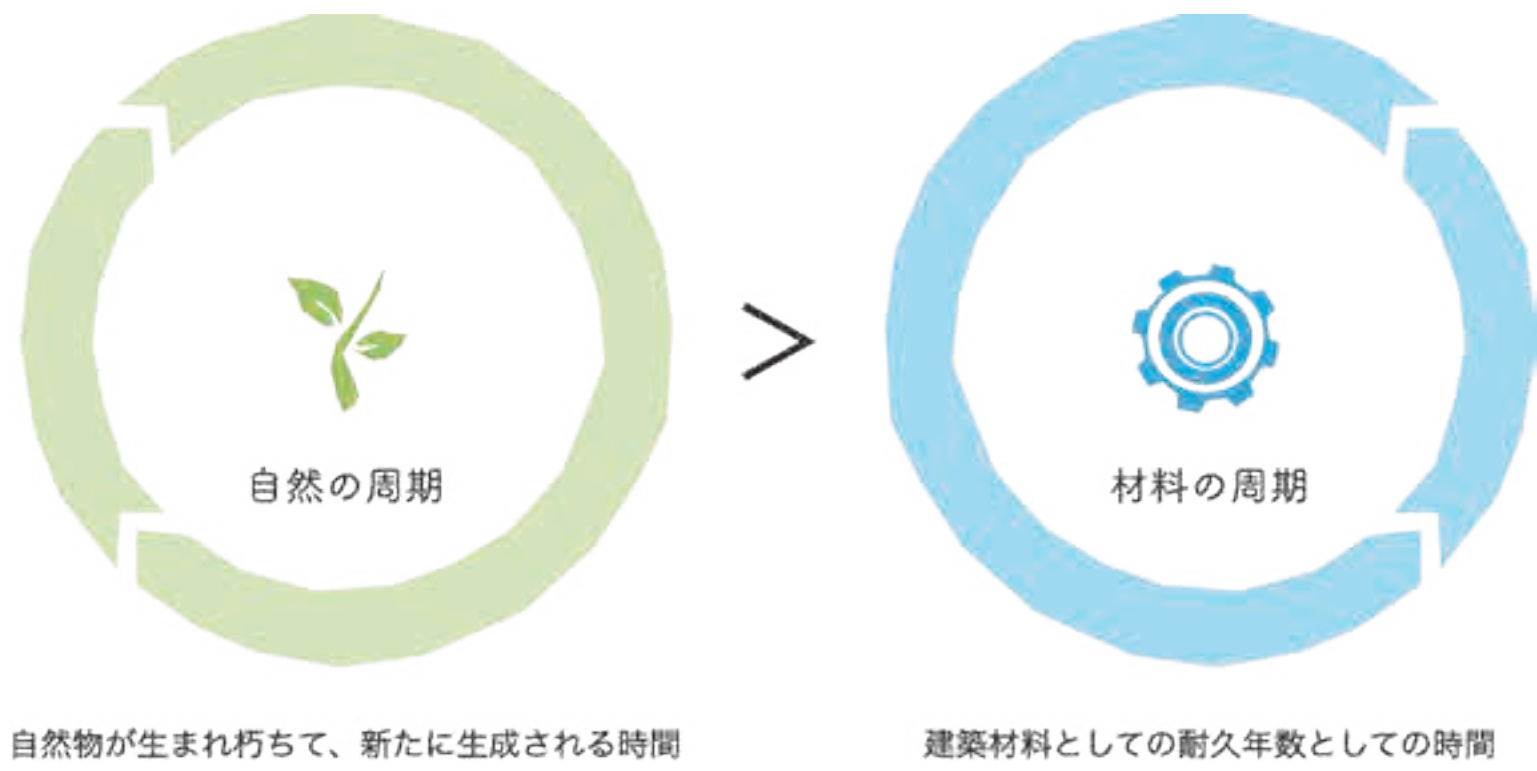
- ・人口 743人 480世帯 ・人口密度 1283.65人/㎢
- ・用途地域 住宅街側 工業地域 最高高さ 20m 北側制限 10m+0.6/1
- その他 工業専用地域 22条の防火区域 全城



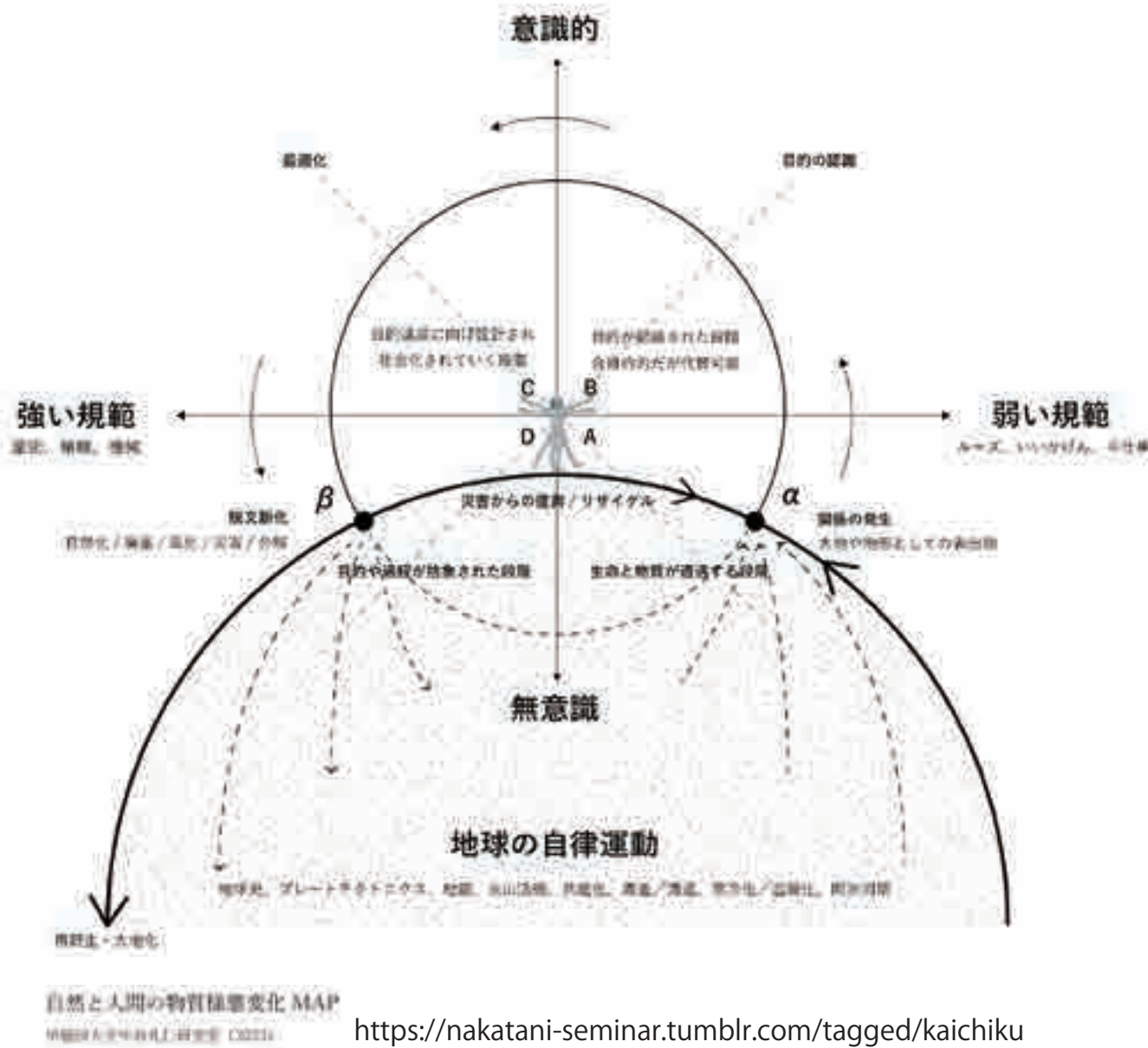
北側を線路、南側を工場と運河に阻まれ街が独立した印象を受ける



0 2 . 解築に倣う建物の長期運用の実現



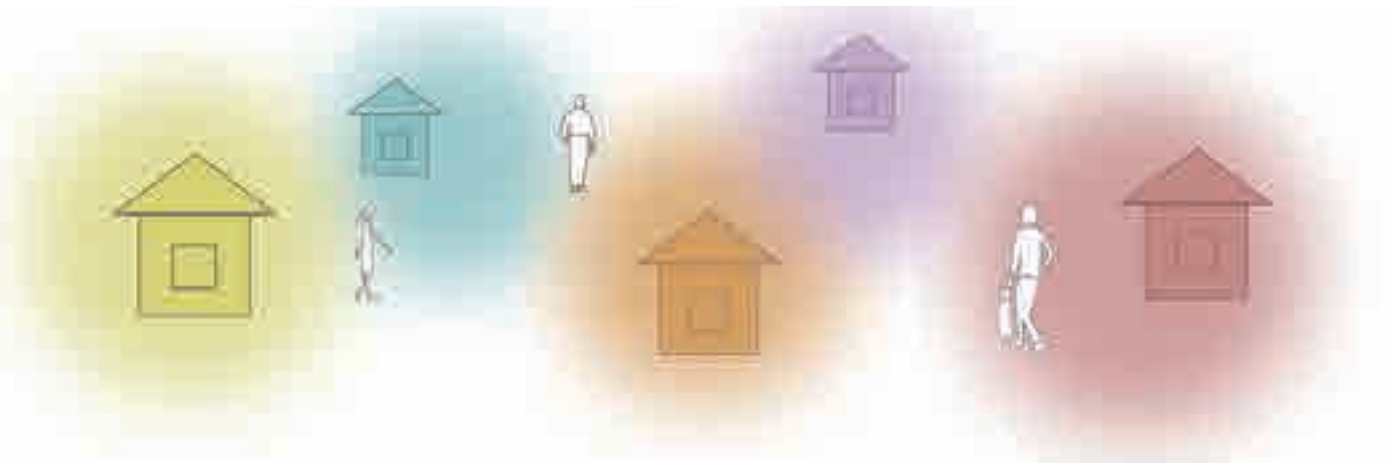
樹木が建築用の木材として活用され、朽ち捨てられ、新たな樹木が生まれ再び活用されるまでの周期と木材単体の耐用年数の周期には、大きな時差が生じる。建築素材としての消費が早ければ、供給が追いつかなくなり、ウッドショックのような事態が今後も起こりかねない。  
これからの設計には新築で建てて終わりではなく、建てた後の建築の変わっていく姿も想定して、建築の長期運営を目指したメタボリズム的な視線も必要になってくるだろう。  
この地に住まう人や企業ができるだけ長くこの地に居続けるための建築を考えたい。



大地が人工物で埋め尽くされている現在、建築家に求められる仕事は、建築を生み出すことから改修、または竣工後の建築のライフサイクルを辿ることへと変化しているように感じる。  
近年、この問題に対し、建築を物質循環の過程として正しく解いて、正しく築き、サイクルを実現する解築学という概念が浸透しつつある。その考え方に倣い、素材に着目した新たな解築のカたちをもたらし、建物の変化に良い期待をさせることを狙いとしている。  
建築を建築物として利用し続けるためには、材の循環や耐用年数に手を加えるよりも、耐用年数に寄り添い、竣工数百年後の建物の終わりまでアプローチする方向性を目指し、設計の手法を考えていくことにした。

0 3 . 既存住民と社員が共生できる建築の提案

既存住民と社員双方の居場所を用意し、企業の土地ながらも地域の拠点としての活用を狙う。  
そこで「集合住宅 × 社員寮」を軸とした複合施設を提案する。  
お互いの距離感を保ちながらも住居間の共有スペースを活用することにより地域コミュニティを活性化させることができる。



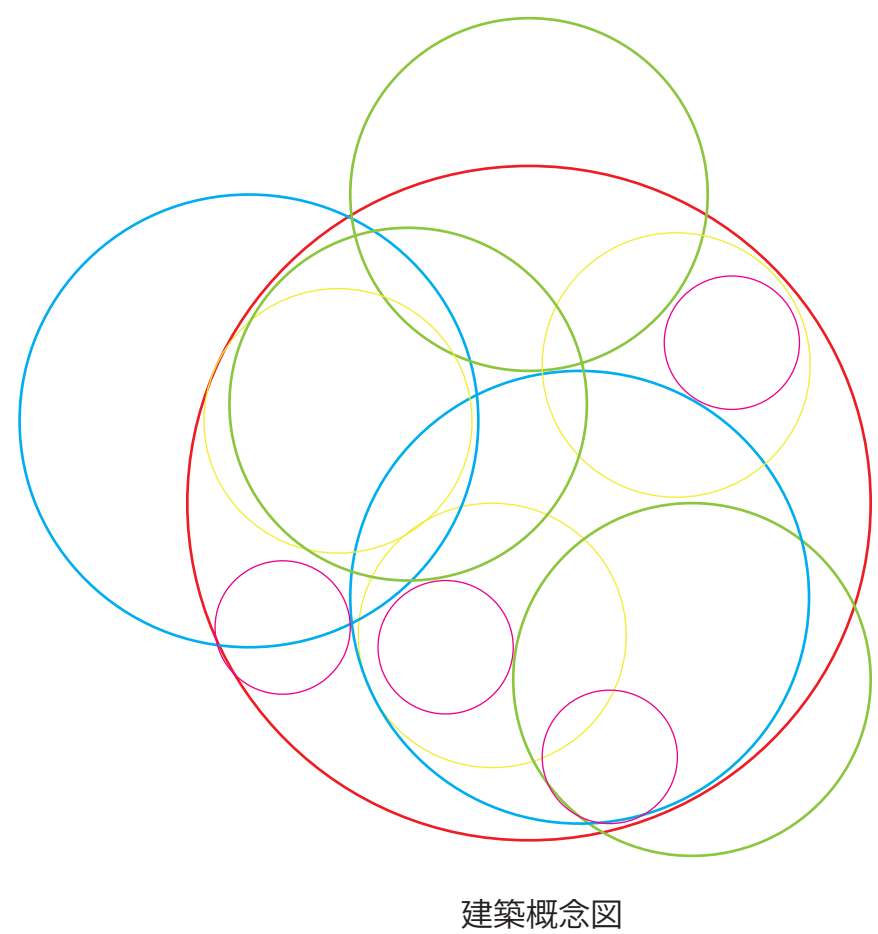
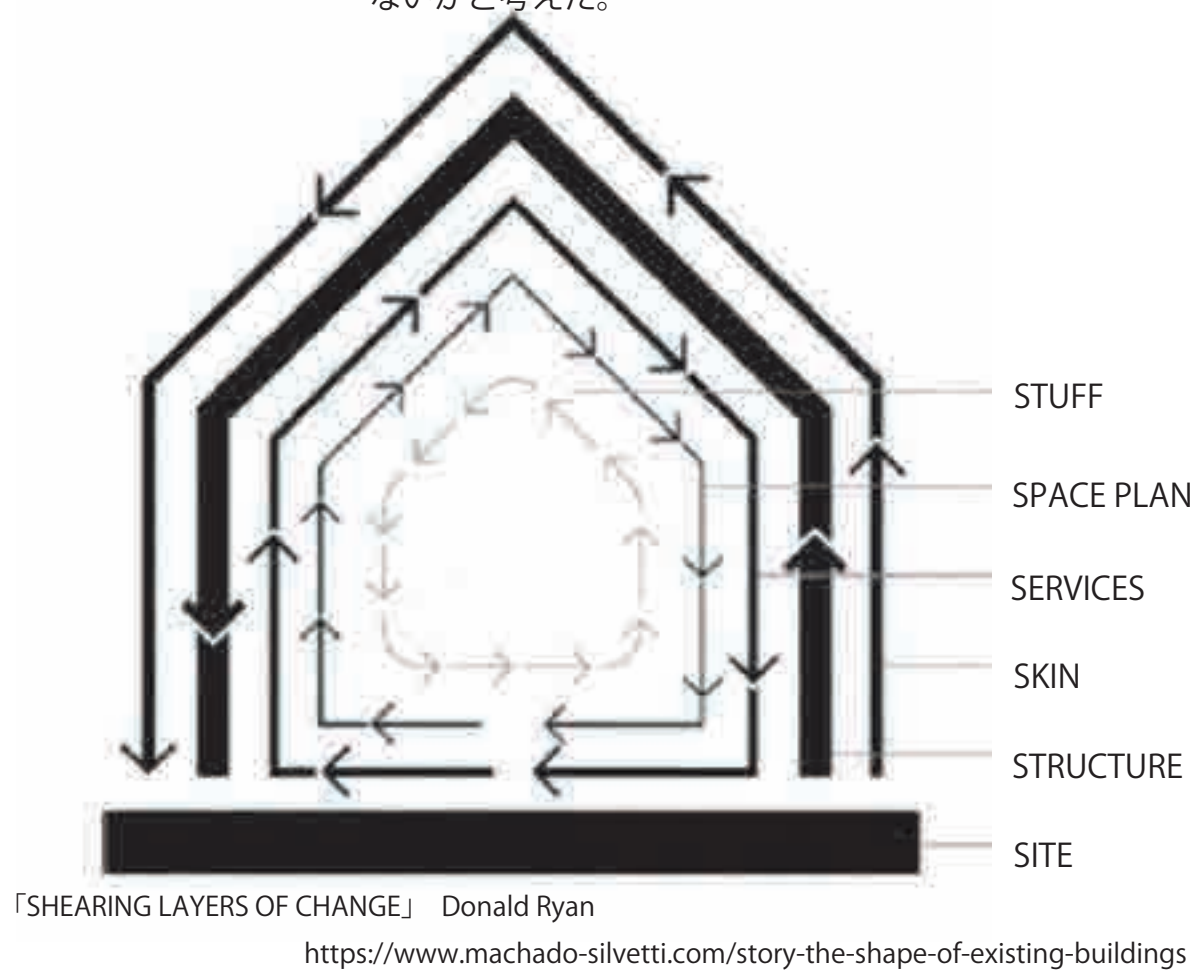
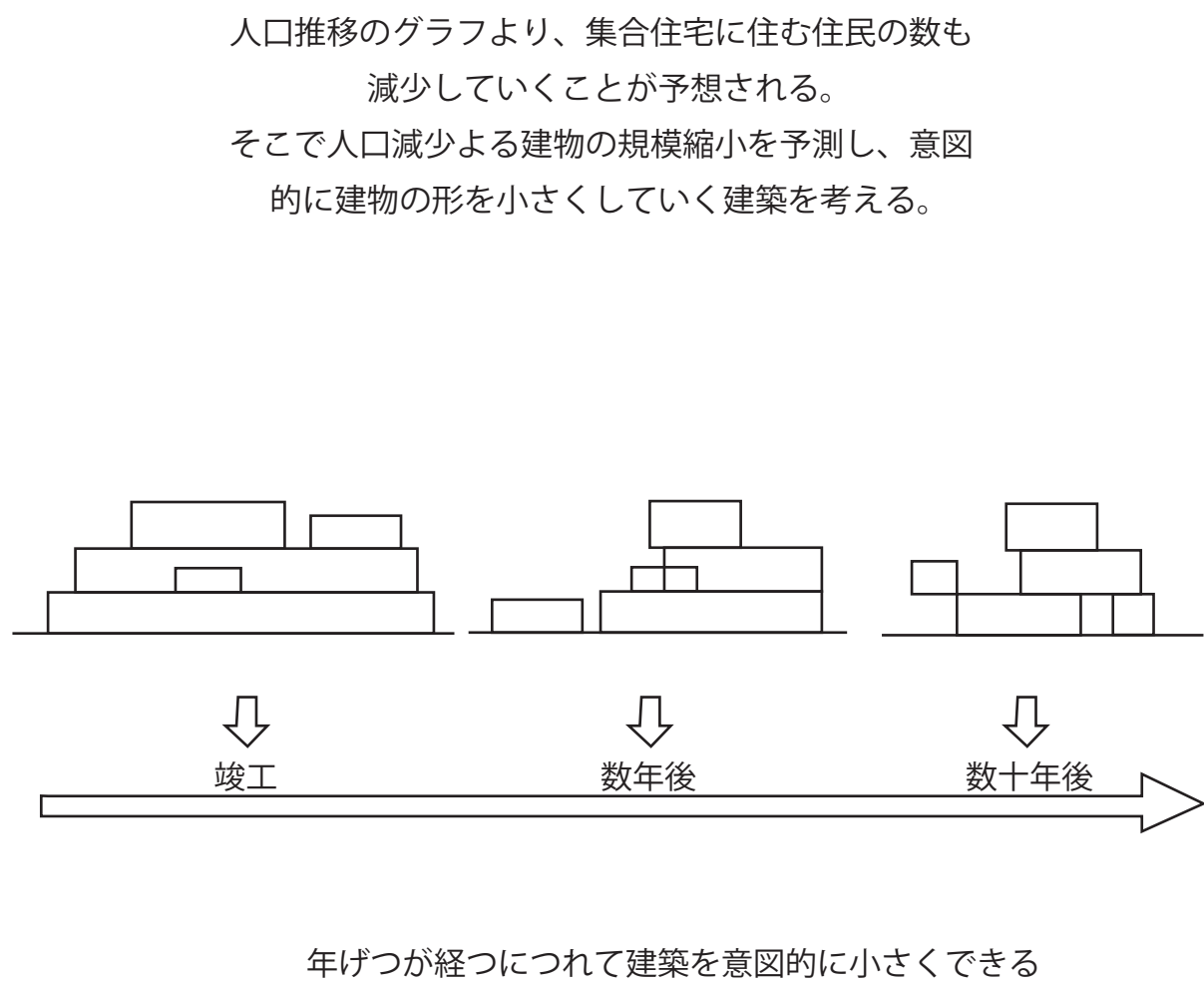
敷地全体に住居を配置し、その間を共有スペースとすることで日頃からコミュニティを誘発する。  
企業側が行っている会社見学、体験用のスペースや戦争の歴史を記したスペースを併設することで外部を巻き込んだ交流の場が生まれる。

0 4 . 規模の増減に対応したシステムの構築

現在、建築物は崩壊時期の異なる要素を多層的に掛け合わせているため、建築の崩壊点が曖昧になっている。

そのため耐用年数が異なる素材を段階にそって可視化した状態で重ねることで、建物内に意図的に「数年で劣化する箇所」「百年以上持つ箇所」を作れるのではないかと考えた。

- 建物のコアとなる箇所
- 耐用年数が長い素材
- 構造的に負荷を受ける箇所
- 一般的な耐用年数を持つ素材
- 定期的に変化する箇所
- 耐用年数が短い素材



0 5 . 共生する空間構成

用途や構造が複雑に絡まるため、階層ごとに行き来できる動線を限定し、既存住民と企業社員のプライベートな空間が混じり合わないようにした。

